



神経

企画：木内博之

（日本神経内視鏡学会理事長，山梨大学医学部脳神経外科学講座）

手術器具の発展と QOL 改善の要望が相まって，外科手術においてはより低侵襲化が求められる傾向が強まっている．従来は顕微鏡手術が主流であった脳神経外科領域でも，開頭範囲を縮小できる神経内視鏡手術のニーズが年々高まっている．

内視鏡的脳神経外科手術は，1910 年の L'Espinasse による膀胱鏡を用いた水頭症治療に端を発し，その後，1990 年代に細径で操作性の高い神経内視鏡機器が開発されたのを契機に広く普及するようになった．

現在でも手術用顕微鏡による手術が主流ではあるものの，手術対象疾患や部位の特性を考慮して，手術用顕微鏡と併用する神経内視鏡支援顕微鏡下手術や内視鏡単独で行う神経内視鏡下手術が用いられている．

本章では神経内視鏡を用いて治療される代表的疾患について，それぞれのエキスパートに執筆を依頼した．さらなる発展が予想される神経内視鏡手術の現状と今後の展望の理解に役立てば幸いである．